

明治20～30年代の 児童雑誌の文章について — 口語体作品の比率の変化に注目して—

小松 聡 子

1. はじめに

これまで、大人向けの小説・新聞等については、口語体への移行について調べられたことはあった。しかし、児童向けの文章についてのまとまった研究は、これまで行われたことはなかった。

そこで、今回、明治20～30年代の児童雑誌の文章について、口語体作品・記事の比率の変化に注目して調べてみた。

2. 調査した児童雑誌の概説

今回、『少年園』・『小国民』・『少年世界』の3誌を選んで調査を行なった。この3誌は、明治20～30年代にかけて出版されていた児童向けの総合雑誌の中でも、代表的な雑誌である。

以下、この3誌について少し概説を述べる。

(1) 『少年園』

明治21年11月～28年4月

少年園発行 月2回刊

A5版 32ページ

編集主筆 山県悌三郎

それまでであった投書雑誌から内容を一変させて、総合雑誌という児童雑誌の新しいタイプをつくり出した雑誌。画期的な雑誌であり、ここから本格的児童雑誌の歴史は出発する。

(内 容) 論説・学校の教科に関連の深いもの・文芸作品・伝記や探検記等

の軽い読みもの・時の話題・投書欄等。

(執筆者) 山県悌三郎・高橋太華・落合直文・森鷗外等、著名な文壇人も執筆している。

(対象) 尋常中学生中心

(2) 『小国民』（『少国民』）

明治22年7月～35年12月

学齡館→北隆館（M29.12）→鳴臯書院（M34.4）発行

月1回刊→月2回刊（23.7）

B6版→A5版（M23.6）

14ページ→増ページ→明治29年頃には100ページ前後

編集主筆 石井研堂→上村才六（M34）

記事の平易鮮明と挿絵面に新面目を開くことを意図した。

明治28年9月号に遼東半島返還を嘆いた記事を掲載したため、発行停止になる。
11月より『少国民』と改題して再刊。

その後、29年12月経営難から発行所が北隆館に移り、さらに34年4月鳴臯書院に移り、読者からの投稿の欄を増やした。

35年1月からは、少年言文一致会の機関紙となる。

36年1月から『言文一致』と改題、青年向けの言文一致の専門誌となる。

(内容) 『少年園』とほぼ同じ。ただし、作品・記事の程度は平易。

(執筆者) 石井研堂・高橋太華・中川霞城等。

(対象) 尋常小学生中心→高等小学校生の読者増加

(3) 『少年世界』

明治28年1月～昭和9年1月

博文館発行 月2回刊

A5版 120ページ前後

編集主筆 巖谷小波

これまでの児童雑誌は、読者の啓発を目的とし、それぞれの主筆を中心とした一種の理念雑誌であったが、『少年世界』ははじめて資本主義的経営にのっとった雑誌。

(内 容) 基本的には『少年園』・『小国民』とほぼ同じであるが、文学的読物重視。又、読者や社会の嗜好に機敏に対応。

(執筆) 巖谷小波・木村小舟・尾上新兵衛・石橋思案・山田美妙・若松賤子・下田歌子等。

(対 象) 尋常小学生～尋常中学生と対象はかなり広い。小学校低学年向けの「幼年」欄、少女向けの「少女」欄も設けられている。

昭和9年まで刊行されていたが、今回は明治39年までを調査した。

3. 文章の分析の方法

雑誌に掲載されている各々の作品・記事が、文語体で書かれているか、口語体か、それとも両者の混じった混合体で書かれているかを調べた。混合体には、地の文が文語体と口語体の混合文のもの、地の文が文語体で会話文が口語体のもの、地の文が文語体で会話文が文語体と口語体のもが含まれている。

対象としては、『少年園』については創刊された明治21年から終刊になった28年まで、『小国民』については同じく創刊された明治22年から終刊になった35年まで、『少年世界』については創刊された明治28年から39年までの雑誌の中から、年毎に3月号・6月号・9月号(月2回刊の場合は前の方の号)の3号を選んだ。それらの号が手に入らない場合は前後の号にして、臨時増刊号は避けた。ただし、『小国民』の明治35年の号は6月号1冊しか手に入らなかったの、1冊だけを調査した。

そして、その雑誌に掲載されている全作品・記事を対象とした。

ただし、会話文のみの作品・韻文・戯曲の台本・児童の投書・目次・広告・表裏表紙は対象から省いた。

4. 分析の結果

各雑誌ごとに、年度別に文語体・口語体、それらの混合体の比率を出してみた結果をまとめたのが表1～3である。

以下、各雑誌ごとに結果について考察を行なう。

(1) 『少年園』

表1をみると、明治21年の口語体の比率が18.2%とやや高いが、この口語体作品・記事8つのうち1つを除いてあとはすべてクイズや娯楽記事の文章である。

表1 文語体・口語体・混合体の比率 — 少年園 (年度別) —

年 度	文 語 体	口 語 体	混 合 体	計
M 21	65.9% (29)	18.2% (8)	15.9% (7)	(44)
M 22	82.3 (51)	4.8 (3)	12.9 (8)	(62)
M 23	97.1 (68)	1.4 (1)	1.4 (1)	(70)
M 24	97.9 (47)	2.1 (1)	0 (0)	(48)
M 25	95.9 (47)	0 (0)	4.1 (2)	(49)
M 26	94.7 (36)	2.6 (1)	2.6 (1)	(38)
M 27	91.1 (41)	2.2 (1)	6.7 (3)	(45)
M 28	97.9 (47)	2.1 (1)	0 (0)	(48)

※ () 内は作品・記事数

この年は、混合体も15.9%とやや高い。しかし、22年～28年の口語体の比率は0～4.8%と非常に低い値を示している。

『少年園』にも口語体の作品・記事は少しだけ見られるし、その中には有名な作品もある。

たとえば、明治22年5月～8月号に掲載されたアーヴィング原作で森鷗外訳の「新世界の浦島」は口語体の敬体で、この時期の口語文としては非常にこなれた文章である。

例文1

ホドソ^そンに沿ふて登つて行つた事のある旅人は、必ずケーツキル山脈を記憶して居ませう。これはアバラツチエン山^{みき}の幹から出た小枝で、遙に西に向いて、仰いで見れば、麓^{ほとり}は河の畔に垂れて、巔^{いたどき}は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。(「新世界の浦島」の冒頭。原文、旧漢字。以下同様。)

また、明治26年9月～27年4月のバーネット原作、若松しづ子訳の「セイラ、クルーの話」も口語体の敬体によるやわらかい名文である。

例文2

一番最初から話しをし升と、ミンチン女史といふは、ロンドン府^{すまひ}に住居した人でした。其住宅は、東京でいふと、銀座通りの様な、大きな趣味のない建^{たてなみ}列の中にも、いとゞ大きく、高く趣味のない家でした。(「セイラ、クルーの話」の冒頭)

その他、論説・講演筆記・クイズ・娯楽等にも少し口語体のものが見受けられる。例として、娯楽の記事の文章を少し挙げておく。第1号(M 21. 11. 3)所収の「此の紋は動きます奇妙です」という記事で、黒い5重の輪が1つの歯車を中心にして5つ集まっている絵があって、次のような文章がついている。

例文3

此の紋を凡そ眼^めの前六七寸の距離^{きより}にて手腕^{てくび}を動かして急く円く環^わに転^{てん}じて御^ごらんなさい。五^ごつの環^わが面白^{うづまさ}く渦巻^{うずまき}の様に動き出します、そして中央^{まんなか}の歯^は車^{ぐるま}は環と反対の方に回転します。

しかしながら、大多数の作品・記事は文語体である。

明治22年5月3日刊行の2巻13号の「日本人第一の欠点」(無署名)という論説文は、流行に流される日本人も批判する中で、「支離滅裂^{しりめつれつ}言文一致と称し」と述べている。統橋達雄氏が、著書『児童文学の誕生——明治の幼少年雑誌を中心に——』^{注(1)}の「『少年園』の巻頭論説」の中で、この「『支離滅裂言文一致』云々^{云々}には、型の喪失による不安感、美意識低俗化への抵抗感といったものから出

ていると思われる』と述べておられるが、同感である。

また、2巻22号(M22.9.18刊行)に「普通文章の説」が載っているが、この中で筆者磯台居士は、「何人にも容易く其意を了解せしむるやうに書かんとせば、言文一致にせざるべからず』と述べて、言文一致の文章を勧めている。しかし、この論の後に、「記者曰く」として、「言文一致もさる事なり、併し今日の処にては標準として害なき言文一致を書くもの未だあらざれば、俄に少年諸子に向けては標準として害なき言文一致を書くもの未だあらざれば、俄に少年諸子に向けて言文一致の文を書くべしとは動むる能はざるなり。(中略)兎も角も、世の少年諸子は、風潮に動がされ、軽忽に人真似すること大なる病なれば、文章の如きも、今俄に言文一致などを学ぶことは注意せざる可からず(後略)」と付け加えている。

さらに、3巻26号(M22.11.18刊行)の岡本監輔の「作文心得一斑」という記事の中でも、「文ノ出来ザルモノノ習癖トシテ、言文一致ナドノ称シ、言ノ雅俗ヲ弁ヘザルモノ多シ』とある。

以上のことなどから考察すると、『少年園』の編集者・記者は、昔からの規範にのっとった格調高い文語文を文章として評価し、口語文はまだ文章として未熟であるとして認めていなかったと考えられる。

山本正秀氏によると、明治17年～22年までは言文一致運動の「第一自覚期」にあたり、山田美妙・二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ等が言文一致体小説家としてめざましい活躍をした時期である。しかし、23年～27年になると、「停滞期」に入り、「第一自覚期」には「約三〇名もの言文一致小説作家を出して、小説界に言文一致時代を現出したが、その言文一致文の多くは、蕪雑な俗語をそのままに書いて洗練が足らず文章として未熟だったこと、また一般の文章観がなお保守的・貴族的だったために俗だ下品だとの非難を浴びたこと、他方あまりに急進的だった欧化主義の反動として明治二一、二年頃から起こった国粹保存の思潮と運動の強いあおりを食ったことなど、以上の諸原因から次第に文章彫琢の声が高まり、また諸種の非言文一致の新文体摸索が始まって、そのため言文一致運動は急に下火になった』^{注(2)}

以上のことを頭に入れて表1を見ると、『少年園』の文章もほぼ同じ傾向を示していることがわかる。

「第一自覚期」にあたる明治21年の口語体の作品・記事の比率は18.2%もあったのに、22年には4.8%と減り、23年以後は、0～2.6%と非常に低い値を示している。

編集者・記者は、世の中の文章に対する考え方にほぼ同調しているといえる。

(2) 『小国民』

表2によると、『小国民』の場合、明治22年の口語体の比率は、53.3%と高い数字を示している。

表2 文語体・口語体・混合体の比率 — 小国民（年度別） —

年 度	文 語 体	口 語 体	混 合 体	計
M 22	43.3% (13)	53.3% (16)	3.3% (1)	(30)
M 23	87.0 (40)	8.7 (4)	4.3 (2)	(46)
M 24	81.6 (40)	8.2 (4)	10.2 (5)	(49)
M 25	83.6 (61)	9.6 (7)	6.8 (5)	(73)
M 26	89.6 (86)	4.2 (4)	6.3 (6)	(96)
M 27	92.3 (72)	3.8 (3)	3.8 (3)	(78)
M 28	81.3 (52)	4.7 (3)	14.1 (9)	(64)
M 29	89.1 (49)	1.8 (1)	9.1 (5)	(55)
M 30	83.1 (69)	7.2 (6)	9.6 (8)	(83)
M 31	75.0 (42)	8.9 (5)	16.1 (9)	(56)
M 32	68.2 (30)	29.5 (13)	2.3 (1)	(44)
M 33	65.0 (26)	27.5 (11)	7.5 (3)	(40)
M 34	33.3 (12)	61.1 (22)	5.6 (2)	(36)
M 35	0 (0)	100 (10)	0 (0)	(10)

これは、1つには、対象をはじめ尋常小学生中心とし、「内容は初めから極めて平易に小学生程度の少年に解しよく面白く又学力智力も進めることを目的とした」^{注(3)}ので、文章もわかり易くということで、口語体を多く取り入れたため。

2 つには、明治 19 年 1 月～21 年 4 月までの間に、5 種の談話体採用の小学校用の国語読本が出版されているという時代の流れの影響が考えられる。小学校の教科書に談話体が採用されるということは、当然小学生を対象とした雑誌の文章に影響を与えたと考えられる。統橋氏が指摘されているように、^{注(4)}主筆の石井研堂がもと小学校の教師であったことも関係していると思われる。また、作品、記事の内容が、小学校の各教科の補助教材的であったことも関係があるだろう。

ここで少し、明治 22 年の口語体の記事の例文を挙げておく。

例文 4

本誌の首に出したのは虎の図であります、立つてるのは牡虎で、臥してるのは牝虎であります。此の獣は、狐、狸、狗、獅子、熊などゝ同く、食肉獣と申して、他の動物の肉を啖うて生活するものですから、怖い獣であります。(M 22. 7. 10 刊行、第 1 号所収の「虎の話」の冒頭。)

子供に話しかけるような、丁寧な口語文である。『少年園』の例文 3 の文章と比べてもこちらの方がやさしいし、又こちらは総ルビになっているのでずっと読み易くなっている。

ところが、明治 22 年には 55.3 % と高かった口語体の比率は、23 年以後急激に減少して、31 年までの間は 10 % 以下の値を示している。そして、文語体が 31 年以外は 80 % 以上を占めている。(M 31 年は、混合体が 16.1 % を占めているので、文語体とその分減って 75.0 %。)

この 23 年以後の口語体急減の理由として、次の 3 点が考えられる。

一つは、編集者・記者が、口語体を否定してはいないが、積極的に評価しているわけではなく、やはり児童に対する規範として示すには文語文の方がふさわしいと考えていたという点である。

明治 22 年 9 月 10 日発行の 3 号の「作文の稽古」の欄に口語体(敬体)の投稿文が載っているが、それに対して、「少年諸君にして言文一致体の文章を作るへ余り感心せざる所なれども、此の篇詞正しく体具はりて、頗る観るに足るべき者あり。」と評している。

口語文は当時まだ文章として完成されていたとは言えず、その意味でも特に子供の間は格調高い文語文を学び、それを手本として文章の練習をする方が望ましいという考え方が表れている。そして、この考え方は、当時の大人の間で根強いものであったと思われる。

はじめ口語体の作品・記事も書いたり、載せたりしていた編集者・記者も、心の中には根強くこうした考えをもっていたようである。

二つ目には、明治23年～27年までの間は、言文一致運動の「停滞期」にあたっていて、世の中の風潮が口語体のものを受け入れにくかったことが考えられる。これは、前の『少年園』の場合と同様である。

三つ目に、対象がはじめは尋常小学生中心であったのが、しだいに高等小学校の生徒にも広がっていったことが挙げられる。

以上の理由等により、明治23年～31年にかけて口語体の作品・記事が急減していたのが、33年以後になるとふたたび急増している。32年には29.5%、33年には27.5%、34年は61.1%、そして35年になるとついに100%になっている。(M31年の混合体が16.1%というのは、この口語体急増の前兆かもしれない)

この口語体急増の理由としては、まず言文一致運動がこの期に大きく花ひらいて、実を結んだということが深く関係している。

山本氏によると、明治28年～32年の「第2自覚期」における言文一致運動の盛り上がりを受けて、明治33年～42年の間は「確立期」に入る。そして、この時期は、「言文一致運動が最高潮に達し、文学上で言文一致体が写生文、自然主義文学両運動を通じて絶対のものとなり、また教育上でも言文一致の方針が確立した時期である」^{注(5)}

当時『少国民』は、人気を博していた『少年世界』(M28年創刊)等の雑誌におかれて、衰退していく傾向にあった。前の『小国民』の概説にも書いたように、経営が苦しくなり、発行所がもとの学齢館から29年12月に北隆館に移り、さらに34年4月には鳴阜館へと移っていった。

こうした中で、『少国民』は、言文一致運動の大きな盛り上がりという流れに乗って、生き残ろうとしたのである。

つまり、口語体の作品・記事を増やし、さらに35年1月からは少年言文一致会（尾崎紅葉会長）の機関紙となったのである。

少年言文一致会は、少年に言文一致を普及するため、明治35年1月組織された会で、次に挙げるのは、35年1月に『少国民』に載った「少年言文一致会趣意書」である。

（前略）近年少しく二三の識者が国語改良だとか言文一致だとかいふ方面に指を染め始めたものゝ夫は猶極めて狭い狭い範囲に於てのみせられて居るので、全社会は依然旧態を脱しないのでおのかしゞ候文も用ゐて居れば漢文体も用ゐて居て、実に混沌たる有様である、試みに一葉の新聞紙を見たならば、如何に吾国の文体が勝手気儘な主義も秩序もない種々雑多な有様に分裂して居るかを知らぬに苦しまぬであらう、蓋し主義の統一を欠いて居る事物はどれ程発達したところで、それは実に割拠的発達で、到底同主義の下に発達した事物と並びたつて燦然たる光輝を放つことは出来ぬのである、故に我国文学に於ける目下の急務は些々たる国語改良よりも実に言文一致にあるので、国文を一致するには抑も如何なる文体を以つてしたら可からうか、蓋し言文一致が最も発達すべき性質を具備して居るところのものだらうと思ふ、言文一致を盛んにならしむるのは徒らに老輩の手を下すのみ待つて居ないで、よろしく全国少年諸君が奮つてこれにあたるべきである、是れ実に吾徒が浅学菲才なるをも顧ず、茲に少年言文一致会なるものを設立して未来の大国民たる少年諸君と共に言文一致主義を鼓吹し、以て我暗澹たる文壇の上に一旗幟を樹て、聊か尽す所あらんとする所以である、（後略）（下線 小松）

そして、機関紙となった35年には、口語体の作品・記事のみを掲載するとともに、読者からの口語体の投稿を掲載し、「言文一致に対する名家の意見」として新渡戸博士の談片を載せたりもしている（M35. 6. 1）。

そして、36年1月に、対象を青年に移して、『言文一致』と改題した。

この少年言文一致会の運動については、山本正秀氏の『言文一致の歴史論考続篇』^{注(6)}所有の「明治三〇年代言文一致運動の輪郭」にくわしい。

(3) 『少年世界』

表3と表1・2を比べてみると、『少年世界』の口語体の比率は、『小国民』の35年の100%を別にすれば、同じ年の『少年園』・『少国民』の比率よりもすべて高い。

表3 文語体・口語体・混合体の比率 — 少年世界（年度別） —

年 度	文 語 体	口 語 体	混 合 体	計
M 28	77.7% (80)	21.4% (22)	1.0% (1)	(103)
M 29	60.6 (43)	36.6 (26)	2.8 (2)	(71)
M 30	53.1 (26)	38.8 (19)	8.2 (4)	(49)
M 31	45.3 (24)	49.1 (26)	5.7 (3)	(53)
M 32	35.7 (20)	62.5 (35)	1.8 (1)	(56)
M 33	39.6 (21)	60.4 (32)	0 (0)	(53)
M 34	30.5 (18)	69.5 (41)	0 (0)	(59)
M 35	17.1 (12) [*]	82.9 (58)	0 (0)	(70)
M 36	1.3 (1)	97.5 (77)	1.3 (1)	(79)
M 37	1.1 (1)	98.9 (90)	0 (0)	(91)
M 38	8.1 (7)	90.7 (78)	1.2 (1)	(86)
M 39	7.3 (7)	92.7 (89)	0 (0)	(96)

明治28年では、『少年園』の2.1%、『小国民』の4.7%に対して21.4%。29年では、『少国民』の1.8%に対して、『少年世界』は36.6%。30年では、『少国民』の7.2%に対して、38.8%。31年では、8.9%に対して49.1%。『少国民』の口語体の比率が上がった32年でも、29.5%に対して62.5%と2倍以上。33年では、27.5%に対して60.4%。34年も61.1%に対して69.5%とやや高い。

そして、また35年以後も80～90%台を示しており、ほとんどが口語体である。

以上の理由として、次の3点が考えられる。

一つは、主筆がそれまで口語体で作品を発表してきた巖谷小波であることが挙

げられる。

巖谷小波は、日本の児童文学の開拓者であり、明治時代の児童文学界の中心的存在であった。しかし、その彼もはじめから児童文学作家を目指していたわけではなく、児童文学を書く前は、硯友社の一員として小説を書いていたのである。彼はまた、言文一致運動の実践を続けていた作家の1人でもあった。明治21年の『五月鯉』^{注(7)}・22年の『妹背貝』^{注(8)}・24年の『ばアや!』^{注(9)}をはじめ、続々と口語体で作品を発表し、23年以後言文一致運動が一時衰退していた時期も口語体で作品を書き続けた。

そして、24年に『こがね丸』^{注(10)}を著して以後、児童文学作品も書き始めたが、この作品は文語体であった。そのため、口語体で書くべきだという堀紫山との間に文体論争を巻き起こした。一方、24年1月3日発行の『幼年雑誌』（1巻1号）の「手枕草紙（其一）虚誕くらべ」を口語体で書き、この後、文語体と併用して口語体でも書いていったが、まだ文章にこなれていないところが見られた。そして、翌25年からは、本格的に口語体で児童文学作品を書き始めた。

以上の経歴を持つ小波が主筆であったということは、他誌に比べ口語体作品・記事が多くなったことと深く関係していると思われる。

小波は毎号、巻頭に「お伽噺」を載せ、他に1～2本ずつ作品・記事を書いている。

また、『少年世界』には小波門下の尾上新兵衛（久留島武彦）・木村小舟・黒田湖山・山内秋生等も口語体で作品・記事を発表し、硯友社時代の仲間であった山田美妙・石橋思案等も口語体の作品を寄せている。

さらに、小波の編集者としての影響力もあったであろう。

口語体が多い理由の二つ目として、『少年世界』が平易でおもしろい交章の作品も入れて、より幅広い読者を得ようとしたことが挙げられる。

「幼年」の欄があるが、すべて平易な口語体である。「少女」の欄も口語体が多い。

三つ目として、前の『少年園』・『小国民』と同じく、時代の影響も考えられる。

明治28年～32年までは、言文一致運動の「第二自覚期」、33年～42年まで

は「確立期」にあたる。

参考までに、山本正秀氏が「文芸倶楽部」・「新小説」両誌掲載の小説について調査された言文一致体百分比^{注(11)}を挙げると表4のようになる。

表4 小説の言文一致体採用率（山本正彦氏調査）

年 度	M28	M29	M30	M31	M32	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39
言文一致体採用率	16 ^(%)	24	36	45	57	61	71	78	78	87	78	91

この値と表3の『少年世界』の値とを比べると、ほぼ同じ傾向を示しているのがわかる。

5. おわりに

今回、『少年園』・『小国民』・『少年世界』の児童雑誌3誌の文章について、明治20～30年代にかけての口語体の比率の変化を追ってみたが、この3誌に關していえば、大人向けの文章の変化に非常によく同調していることがわかった。調査する前には、子供には口語体の方がわかり易いという意味で、大人向けの出版物よりも早くから口語体が多くなっているかもしれないという思いが少しはあったのだが、あまりにも大人向けの文章と同じ傾向を示しているのが、驚いたほどである。他の雑誌を調べていないので断定することはできないが、児童向けの文章というのは世の中の動きに非常に敏感に対応しているように思われる。これは、児童文学の内容が、世の中の動きに非常に敏感に対応しているのと似ているように思う。又、一度出来上った「規範」というものの根強さを感じた。

今後は、さらに明治20～30年代の別の雑誌を調査すると同時に、それ以後の時代の雑誌についても続けて調べていきたい。

また、単に文語体・口語体・混合体の比率を調べるだけでなく、口語体の作品・記事の文末についてももっとくわしく見ていきたい。作品・記事をジャンルに分けて、違いも見たい。

- 注(1) 昭和47年10月、桜楓社刊。
- 注(2) 『近代文体発生の史的研究』(昭和40年7月、岩波書店刊)の「序章 第三節 言文一致運動史の時代区分と各期概観」。
- 注(3) 『北隆館五十年を語る』(昭和15年11月、北隆館刊)のp57。
- 注(4) 『児童文学の誕生 — 明治の幼少年雑誌を中心に —』(注(1)と同じ)の「『小国民』の文芸作品」。
- 注(5) 注(2)と同じ。
- 注(6) 昭和56年2月、桜楓社刊。
- 注(7) 「我楽多文庫」第1号(M21. 5. 25)～第12号(M21. 11. 25)に掲載され、22年4月『初紅葉』と改題して春陽堂から刊行された。
- 注(8) 明治22年8月刊の『新著百種』(吉岡書籍店)の第4号所収。
- 注(9) 明治24年8月刊の『新著百種』の第17号所収。
- 注(10) 明治24年1月に叢書「少年文学」の第1巻として刊行された。
- 注(11) 『言文一致の歴史論考 続篇』(注(6)と同じ)の「言文一致運動の展開」。